楚遊日記（2）

●崇禎一〇（一六三七）年二月一日～二十九日、二九日間　徐霞客五十二歳

●訳注稿

第三部　衡陽滞在（二月十四日～二十九日）

［二月十四日～十八日］

《概要》金祥甫の家にやっかいになる。無一文となり、金や静聞が、旅行資金捻出のための案を考えてくれるが、徐自身は悲観的。天候が悪く外出もできず、衣類すら金に頼り切りの現状に深く落ち込む。

■本文の部

十四・十五日

俱在金寓。

十六日

金爲投揭内司、約二十二始會衆議助。初、祥甫謂己不能貸、欲遍求衆内司共濟、余頗難之。靜聞謂彼久欲置四十八願齋僧田於常住、今得衆濟、即貸余爲西遊資。俟余歸、照所濟之數爲彼置田於寺、仍以所施諸人名立石、極爲兩便。余不得已、聽之。

十七・十八日

俱在金寓。時余自頂至踵、無非金物、而顧僕猶蓬首赤足、衣不蔽體、只得株守金寓。自返衡以來、亦無晴霽之日、或雨或陰、泥濘異常、不敢動移一歩。

■訳注の部

●訓訳

十四・十五日

俱に金の寓に在り。

十六日

金ために揭を内司に投ず。二十二を約して、始めて衆を會して助を議せんとす。初め、祥甫謂ふ、己は貸すこと能わず、遍く衆内司に共濟を求めんと欲す、と。余頗る之を難しとす。靜聞謂ふ、彼は久しく四十八願の齋僧田を常住に置くを欲す、今衆濟を得ば、即ち余に貸して西遊の資と爲さん。余の歸るを俟ち、濟する所の數に照して、彼のために田を寺に置き、仍りて施す所の諸人名を以て石を立てん。極めて兩便爲らん、と。余已むを得ずして之を聽くのみ。

十七・十八日

俱に金の寓に在り。時に余、頂より踵に至るまで、金の物に非ざるは無し。而して顧僕は猶ほ蓬首赤足にして、衣は體を蔽はず。只だ株を得て金の寓に守るのみ。衡に返りて以來、亦た晴霽の日無く、或ひは雨ふり或ひは陰り、泥濘常に異なり、敢へて一歩を動移せざるなり。

●語注

十六日

○掲　掲帖。通知や案内等を役所の掲示板に貼り出すこと。
○内司　諸王府の属官。
○共濟　共同して救済する。
○四十八願　阿弥陀仏が過去世に法蔵菩薩であったときに立てた願。願を掛けること一般を言うか。
○齋僧田　齋僧は、食事を僧侶に施すこと。齋僧田で僧侶の日用に充てる資金を得るための田畑か。
○常住　永久に存在すること。このあたり、よく分からない。
○得株守金寓　「韓非子」五蠹篇の故事だが、ここは、成果のあがらないことを、ただ手をこまねいて待っているだけ、ということだろう。

●口語訳

《13》金祥甫の家での無為の日々

［十四・十五日］

ずっと金祥甫の寓居に滞在した。

［十六日］

金祥甫が私のために、王府の属官達に対し、掲示物を掲示してくれた。「二十二日に属官達による会合を開き、そこで徐霞客を幇助することを話し合うこととする」というものであったらしい。

そもそも、金祥甫はこう言っていた「自分自身にはあなたに貸してあげるお金は無い。そこで広く属官達に募り、皆で共同して支援しようと思っている」と。私は、それは難しいだろうと考えた。

すると静聞が言うには、彼は久しく、願掛けとして、永続的な僧侶のための田畑を購入したいと思っていた。いま属官達から支援を得られたならば、すぐにそれを私に貸与して西方旅行の資金とする。そして私がここに戻ってきたときに、支援してくれた金額に応じて、彼らのために田畑を買って寺院に寄附し、支援してくれた人の名前を石碑に刻んで残すのはどうか。そうすれば、西方旅行の資金を得ることと、僧侶のための田畑を購入することとの二つの願いが両得になるのではないか、と。

私はどうすることもできず、彼の話を聞くしかなかった。

［十七・十八日］

両日とも金祥甫の寓居に滞在した。

その当時私は、頭の先から足の先まで、衣服類は何から何まですべて金祥甫によらない

ものはなかった。しかも、顧僕はいまだに髪はざんばらで素足であり、衣服は身体を覆いきれないさまだった。まさに金祥甫の寓居で「株を守る」ありさまだった（成果のあがらないことを、ただ手をこまねいて待っているだけだった）。

衡陽城に戻ってきてから、晴の日はなく、雨が降るか曇りかで、道路のぬかるみは尋常ではい。そこで一歩も外にでることはなかった。

［二月十九日］

《概要》劉明宇に会いに行く。劉は好漢で、盗賊をとっ捕まえて、取られた徐霞客の荷物を取り返してやろう、と言ってくれる。

■本文の部

十九日

往看劉明宇、坐其樓頭竟日。劉爲衡故尚書劉堯誨養子、少負膂力、慷慨好義、尚書翁故倚重、今年已五十六、奉齋而不禁酒、聞余被難、即叩金寓余、欲爲余緝盗。余謝物已去矣、即得之、亦無可爲西方資。所惜者唯張侯《南程》一紀、乃其家藏二百餘年物、而眉公輩所寄麗江諸書、在彼無用、在我難再遘耳。劉乃立矢神前、曰：「金不可復、必爲公復此。」余不得已、亦姑聽之。

■訳注の部

●訓訳

十九日

往きて劉明宇を看る。其の樓頭に座して日を竟ふ。

劉は衡の故の尚書劉堯誨の養子なり。少くして膂力有り、慷慨にして義を好む。尚書翁故に倚重す。今年已に五十六にして、奉齋なるも而も酒を禁ぜず。

余の難を被るを聞き、即ち金に寓せる余を叩き、余が爲に盗を緝せんと欲す。余謝す、物已に去れり、即し之を得るも、亦た西方の資となすべき無し。惜しむ所は唯だ張侯の《南程》一紀なり。乃ち其の家に藏せらるること二百餘年の物なり。而して眉公輩の麗江に寄する所の諸書は、彼に在りては無用なるも、我に在りては再び遘ひ難きもののみ、と。

劉乃ち矢を神前に立てて曰く「金は復すべからざるも、必ず公の爲に此を復せん」と。余已むを得ず、亦た姑く之を聽くのみ。

●語注

○劉明宇　彼については、本書の情報しかない。後掲「劉堯誨」注参照。

○樓頭　楼上。

○劉堯誨　（一五二二～一五八五）字は君納、号は凝斎、臨武の人。嘉靖三十二年（一五五三）の進士。福建巡撫、江西巡撫などを歴任し、盗賊や倭寇の平定に功績があった。南京兵部尚書に至り、機務に参与したが、張居正のことにからんで致仕し、衡陽に帰り卒した。「虚籟集」がある。

○慷慨　意気盛ん。
○好義　好漢ということか。
○倚重　頼りにしていて重んじる。養子にしたことを言うか。
○奉齋　精進し肉食を断つ。
○叩　叩門。訪ねること。
○緝　逮捕する。
○一紀　紀に、記載する、記すの意味がある。記したもの、で書籍を指すか。
○矢　誓に通ず。

●口語訳

《14》好漢劉明宇

［十九日］

劉明宇に会いに行く。一日中、彼の家の楼閣の上で過ごす。

劉明宇は、衡州出身で元の兵部尚書であった劉堯誨の養子である。若いころから力持ちで、意気盛んな好漢であった。そこで劉尚書は彼を見込んで養子にしたのである。その劉明宇は今年ですでに五十六歳で、肉食を断ってはいるが酒は避けない。

劉は、私が難に遭遇したと聞き、すぐに金祥甫の寓居いる私を訪ねてきてくれて、盗賊をつかまえてやろうという。私は辞謝して言った「持ち物はすでに持ち去られてしまいました。仮に取り戻すことができたとしても、西方旅行の費用になるようなものはありません。ただ残念なことは、張侯の「南程続記」一冊である。これぞ張の家に二百年以上にわたって蔵されていたものである。また陳継儒達が麗江の人々に宛てた書簡は、盗賊にとっては無用なものであるが、私にとっては二度と手に入れることができない貴重なものである、と。

すると劉明宇は、神に誓いを立てて言う「金銭は取り戻すことができないとしても、きっとあなたのために「南程続記」と書簡類は取り戻します」と。私はどうすることもできず、ただ彼の話を聞くしかなかった。

［二月二十日］

《概要》天候がようやく晴れ、城内外を散策。少し気分も晴れてきた。しかし、近辺で治安が悪化していることを聞く。

■本文の部

晴霽。出歩柴埠門外、由鐵樓門入。途中見折寶珠[*1]茶、花大瓣密、其紅映日；又見折千葉緋桃、含苞甚大、皆桃花冲物也、擬往觀之。而前晩下午、忽七門早閉、蓋因東安有大盗臨城、祁陽亦有盗殺掠也。余恐閉於城外、遂復入城、訂明日同靜聞往遊焉。

●校勘

＊1珠　底本は株。黄珅が乾隆本により改めるのに従う。以下同じ。

■訳注の部

●**訓訳**

二十日

晴霽たり。出でて柴埠門外を歩き、鐵樓門より入る。途中折れたる寶珠茶を見る。花は大にして瓣は密にして、其の紅は日に映ゆ。又た折れたる千葉緋桃を見る。含苞甚だ大なり。皆に桃花冲の物なり。往きて之を觀るを擬す。

而して前晩下午、忽ち七門早に閉ず。蓋し東安に大盗の城に臨む有り、祁陽にも亦た盗の殺掠する有るに因るなり。余城外に閉さるるを恐れ、遂に復た城に入る。明日靜聞と同に往きて遊ぶを訂す。

●語注

○折　折れ曲がった、か。
○寶珠茶　二月七日条。
○瓣　花びら。
○千葉緋桃　緋桃は、桃の花。千葉緋桃は、花びらがたくさんある桃の花、もしくは銘柄か。
○含苞　咲こうとして膨らんでいる蕾み。
○擬　助動詞。……しようとする。
○前晩　前日ということか。
○東安　永州府の県。
○祁陽　永州府の県。
○訂　あらかじめ取り決める。

●口語訳

［二十日］

《14》衡陽散策

晴天。柴埠門から城外へ出て散歩し、鉄楼門から入城した。散歩の途中で折れ曲がった宝珠茶の木を見かけた。花は大きく、花びらも稠密で、陽光のもとで赤く照り映えていた。さらに折れ曲がった千葉緋桃も見た。今にも開きそうな花弁がとても大きかった。これらの花は、どちらも以前滞在していた、城外の天母庵のある桃花冲の名物である。そこで桃花冲に行って花を観賞しようと思った。

しかし昨日の午後に、突然、衡州城の七つの門が早々に閉ざされたことがあった。思うに、東安県で大盗が攻めてきて県城に迫ったことがあったり、祁陽県でも盗賊が殺戮強奪を働いたりしたことがあったためだろう。（そのため盗賊を警戒して早めに城門を閉ざしたのだろう。）私は（桃花冲まで行ってしまうと、）城外に取り残されてしまうかもしれないと心配し、（桃花冲へは行かず）また城内に戻った。そして明日、静聞と一緒に桃花冲へ行って遊覧することを取り決めた。

［二月二十一日］

《概要》雨で桃花冲へは行けず。劉明宇が蕨の芽の料理を持ってきてくれる。とてもおいしい。以前、衡陽の桃花冲天母殿で食べた葵菜とあわせて、三大珍味のうちふたつを衡陽で食べられたことを喜んでいる。徐書客は、旅行中はなんでも食べ、貧しい食事でも不満は述べない。一方、その土地に固有の珍しい食べ物についてはしばしば記録している。ここでも郷土の江陰にはない食材に、衡陽で出会ったことを記すが、劉明宇がもたらしてくれたことを感謝する気配が見える。遊記には、徐霞客自身の心情が記されることは希だが、散々な目に遭っている中で、劉明宇の気遣いに心が動かされているのがうかがえる。

■本文の部

二十一日

陰雲復布、當午雨復霏霏、竟不能出遊。是日南門獲盗七人、招黨及百、劉爲余投揭捕廳。下午、劉以蕨芽爲供餉余、幷前在天母殿所嘗葵菜、爲素供二絶。余憶王摩詰「松下清齋折露葵」、及東坡「蕨芽初長小兒拳」。嘗念此二物、可與薄絲共成三絶。而余郷倶無。及至衡、嘗葵於天母殿、嘗蕨於此、風味殊勝。蓋葵鬆而脆、蕨滑而柔、各擅一勝也、是日午後、忽發風寒甚、中夜風吼、雨不止。

■訳注の部

●訓訳

二十一日

陰雲復た布く。午に當り、雨復た霏霏たり。竟に出遊する能わず。

是の日、南門にて盗七人を獲、招黨百に及ぶ。劉余が爲に揭を捕廳に投ず。

下午、劉蕨芽を以て供と爲し余に餉(おく)る。前に天母殿に在りて嘗めし所の葵菜を幷(あは)せて、素供二絶となす。余憶ふ、王摩詰に「松下清齋、露葵を折る」、及び東坡に「蕨芽初めて長ずるに小兒の拳」あり。嘗て此の二物を念じ、薄絲と共に三絶を成すべし。而して余が郷には倶に無し。衡に至るに及び、葵を天母殿に嘗め、蕨を此に嘗む。風味殊に勝れり。蓋し葵は鬆にして脆く、蕨は滑にして柔なり。各々一勝に擅(た)けるなり。

是の日の午後、忽ち風發し寒甚し。中夜風吼え、雨止まず。

●語注

○招黨　招を、黄珅らは「招供（自白する、罪を認めて出頭する）」と訳す。任国瑞らはこの「盗」を起義軍（反明勢力）とする。

○投揭　徐霞客が強盗に盗まれたものを揭示し、逮捕された盗賊がそれらを保持しているかもしれないとして揭示をしたのであろう。

○捕廳　州県の官署で、緝捕（罪人を逮捕する）を責務とした。

○蕨芽　蕨はワラビ。蕨芽は、蕨の若芽であろう。

○葵菜　アオイの類いか。

○絶　絶品ということか。

○王摩詰「松下清齋折露葵」　王維（六九九～七六一）、字は摩詰。「積雨網川荘作」に「山中習静觀朝槿、松下清齋折露葵（山中に習静して朝槿を観、松下に清斎して露葵を折る：山中で座禅して静寂を習いながら、無常を感じさせる槿の花を眺め、松の下で清らか

な御斎を取ろうとして、露をおいた葵を手に取る)」の句がある(「王維集」巻五)。遊記で、先人の詩文を引用することは珍しい。

○東坡「蕨芽初長小兒拳」　この句は黄庭堅のもの。黄庭堅は、(一〇四五～一一〇五)、字は山谷。彼の「觀化十五首　其十一」に「竹筍初生黄犢角、蕨芽已作(一本作「初長」)小兒拳(竹筍初めて生ずるは、黄なる犢角にして、蕨芽の已に作るは小児の拳：筍の生え始めは黄色い牛の角のようで、蕨の芽が開いたら子どもの拳のようだ)」の句がある(「黄山谷詩集」外集補巻第三)。ここでは黄庭堅を蘇東坡と取り違えている。

○薄絲　薄を、黄珅らは、蓴ではないか、とする。そうであれば、苴蓴、蘘荷に同じく、ミョウガの類い。

○鬆　しまりがなく、すきまがある。

○擅　長けている。

●口語訳

[二十一日]

《15》劉明宇がもたらした珍味を味わう

暗く空を覆う雲がまた垂れ込めている。正午ごろに、雨がしきりに降ってきた。結局外出できなかった。

この日、衡陽城の南門で、盗賊七人が捕獲され、その自供により逮捕された仲間が百人に及んだ。劉明宇は、私のために、罪人を逮捕している捕庁に、盗品に関する書類を提出してくれた。

午後、劉明宇が、蕨の芽を用意して私に食事として振る舞ってくれた。これと、先に天母殿にいたときに食べた葵菜とあわせて、精進料理の絶品二品である。私が思い出すところでは、王維に「松の下で清らかな御斎を取ろうとして露をおいた葵を手に取る」の句があり、また黄庭堅に「蕨の芽の開いたさまは子どもの拳のようだ」の句がある。かつてこの葵と蕨にあこがれ、苴蓴(ミョウガ)とあわせて、三大絶品だと思っていた。しかし、私の故郷にはこれらの食べ物はいずれも無かった。それが衡州に至ると、天母殿で葵を食べ、ここで蕨をいただくことになった。風味がとてもよい。思うに、葵はゆるやかでもろく、蕨はなめらかで柔らかい。それぞれに特長があり、すばらしい。

この日の午後に、突然風が吹き始め、とても寒くなった。夜半に至るに風は叫ぶように吹き荒れ、雨も降り止まない。

[二月二十二日]

《概要》静閑とともに、城北の桂花園を訪ねる。二月七日にも訪ねているが、花が変わらず、美しく咲き誇っているのを眺めているうちに、人間の側がすっかり変わってしまったことを思い、感傷にふける。そのときはピンピンしていたはずの艾行可などの人々は、いまや鬼籍に入っていて、この世からいなくなってしまった。そして霞客自身の感情も、かつてのように花を愛でることはできず、なににつけても人の運命・無常を感じずにはおれなくなっている。何事にも動揺せず冷静な霞客であったが、このたびの事件は彼の心情を

大きく揺さぶるものであった。この日の記述は、霞客らしからぬほど感傷的である。

■本文の部

二十二日

晨起、風止雨霽。上午、同靜聞出瞻岳門、越草橋、過緑竹園。桃花歴亂、柳色依然、不覺有去住之感。入看瑞光不値、與其徒入桂花園、則寶珠盛開、花大如盤、殷紅密瓣、萬朶浮團翠之上、眞一大觀。徜徉久之、不復知身在患難中也。望隔溪塢内、桃花竹色、相爲映帶、其中有閣臨流、其巔有亭新構、閣乃前遊所未入、亭乃昔時所未有綴。急循級而入、感花事之芳菲、歎滄桑之倏忽。登山踞巔亭、南瞰湘流、西瞻落日、爲之憮然。乃返過草橋、再登石鼓、由合江亭東下、瀕江觀二豎石。乃二石柱、旁支以石、上鐫對聯、[一曰、「臨流欲下任公釣。」一曰、「觀水長吟孺子歌。」]非石鼓也。兩過此地、皆當落日、風景不殊、人事多錯、能不興懐！

■訳注の部

●訓訳

二十二日

晨に起く。風止み雨霽れたり。

上午、靜聞と同に瞻岳門を出づ。草橋を越え、緑竹園を過ぎる。桃花歴亂、柳色依然たり、覺えずして去住の感有り。

入りて瑞光を看んとするに値はず。其の徒と桂花園に入れば、則ち寶珠盛開なり。花の大なること盤の如く、殷紅密瓣あり。萬朶團翠の上に浮かび、眞に一大觀なり。徜徉之を久しくす、復た身の患難の中に在るを知らず。

溪を隔つるの塢内を望めば、桃花竹色、相映帶を爲す。其の中に閣の流れに臨む有り。其の巔に亭の新たに構ふる有り。閣は乃ち前遊に未だ入らざる所にして、亭は乃ち昔時に未だ綴ること有らざる所なり。急に級に循ひて入る。花事の芳菲に感じては、滄桑の倏忽なるを歎ず。山に登り巔の亭に踞す。南のかた湘の流れを瞰、西のかた落日を瞻るや、之が爲めに憮然たり。

乃ち返りて草橋を過ぎ、再び石鼓に登る。合江亭より東に下り、瀕江にて二豎石を觀る。乃ち二石柱なり。旁に支ふるに石を以てす。上に對聯を鐫す。一に曰く、「流れに臨みて任公の釣を下さんと欲す。」一に曰く、「水を觀て孺子の歌を長吟す。」石鼓に非ざるなり。兩たび此の地を過ぐるに、皆に落日に當る。風景は殊ならざるも、人事は錯ふこと多し。能く懐を興さざらんや！

●語注

○去住之感　去住は、去留に同じく、立ち去ることと留まること。ひいて、なくなってしまったものと存続しているもの。黄珅は「人去物留」と解す。以前訪れたときと変わらないように咲き誇る花を見て、難にあって死んでしまった艾行可のことを思っているのであろう。

○殷紅　黒みがかった赤色。

○團　集まる、あるいは取り囲む。

○徜徉　逍遙に同じ。きままに歩き回る。
○其中　黄珅等は、前文に続けて解し、「塢の中」とするが、後文の「循級而入」は次に述べる「閣」に入る、と解するのがよいと考え、「桂花園の中」と解した。
○前遊　二月七日条に、桂花園を訪問したことを記す。
○所未有綴　黄珅らは、まだ建設されていない、と解するが、あるいは霞客が綴っていない（書き記していない）かもしれない。
○芳菲　草花が美しく咲き香る。
○滄桑之倏忽　滄桑は、滄海がいつのまにか変じて桑畑となること。世の中の移り変わりが激しいたとえ（「古詩十九首」）。倏忽は、極めて短時間。黄珅は、「人世の無常」と訳す。
○山　高殿の上部に亭子がある、としているのに、「山に登る」というのはつじつまが合わない。あるいは桂花園の中にある小山か。
○再登石鼓　二月一日条に、石鼓山に登ったことを記す。
○任公釣　古代の任国の公子で、釣りを得意とした。「荘子」外物篇にある。
○孺子歌　屈原との対話のあとで漁父が歌った歌（「楚辞」漁父）。「孟子」離婁上では「孺子（子ども）」が歌っていたことになっている。

●口語訳

［二十二日］

《16》緑竹園と石鼓山再訪

早朝に起きた。風も雨も止んでいた。

午前に、静聞とともに瞻岳門から城外へ出る。草橋を越え、緑竹園を訪ねる。桃の花は咲き誇り、柳は以前と変わらず緑の色が鮮やかである。思わず、昔と変わらぬ花木と、変わり果てた人々との対比を感じた。

園に入り、瑞光和尚に会おうと思ったが不在で会えなかった。そこで彼の弟子達と桂花園に入ったところ、宝珠が盛大に開いていた。大きな花は盤ほどもあり、色は深紅で花瓣は緊密である。一万もの花のついた枝が、密集する緑の上に浮かび上がっていて、まことに一大景観であった。しばらくそぞろ歩きをして、我が身が艱難の中にあることを忘れることができた。

窪地の中の渓流を隔てたところを眺めると、桃花の紅と竹の色の緑とが、それぞれコントラストをなして鮮やかである。その中に流れに臨んで高殿がある。その高殿の上部に、作られたばかりの亭子があった。その高殿は、前に桂花園に遊んだときには入らなかったものであり、亭子についてはかつてはまだ作られていなかった。そこで早速階段を上って高殿に入った。変わらぬ花の美しさ、芳しい香りを感じるにつけ、人世の無常、人間のはかなさを詠嘆した。高殿（山）を上って上部に備えられている亭子で腰をおろした。南の方に湘江の流れを眺め、西の方に落日を見るや、憮然たる、失意の思いにかられた。

そこで引き返し草橋を渡り、再び石鼓に登る。合江亭から東に下って、河沿いで二竪石を見る。これは二つの石柱で、それを支える石がある。石柱の表面に「対句（対聯）」が彫られている。ひとつは「流れに臨んで任公の釣針を下宋と思い」で、もうひとつは「川を眺めて孺子の歌を長吟する」とある。これはいわゆる石鼓ではなかった。

二度、この地を訪れたが、どちらも落日の時だった。見えている風景は異ならないのに、人のことは多くが変わってしまった。感懐を興さないわけにはいかない。

［二月二十三日］

《概要》城外へ赴き、強盗に襲われて亡くなった艾行可の弔いに参加する。非常に感傷的になっている。城内に戻り、水府殿にて占いをし、今後の進む行程を問う。湖北ルートか広西ルートかを問い、広西ルートがよいとのお告げを得る。

■本文の部

二十三日

碧空晴朗、欲出南郊、先出鐵樓門。過艾行可家、登堂見其母、則行可屍已覓得兩日矣、蓋在遇難之地下流十里之雲集潭也。其母言：「昨親至其地、撫屍一呼、忽眼中血迸而濺我。」嗚呼、死者猶若此、生何以堪！詢其所傷、云「面有兩槍」。蓋實爲陽侯助虐、所云支解爲四、皆訛傳也。時其棺停於城南洪君鑒山房之側。洪乃其友、併其親。畢君甫適挾青烏至、蓋將營葬也、遂與偕行。循廻雁西麓、南越崗塢、四里而至其地。其處亂崗繚繞、間有揜關習梵之室、亦如桃花冲然、不能如其連扉接趾、而閟寂過之。洪君之室、緑竹當前。危崗環後、内有三楹、中置佛像、左爲讀書之所、右爲僧爨之處、而前後俱有軒可憩、庭中盆花紛列、亦幽棲淨界也。艾棺停於嶺側、亟同靜聞披荊拜之。余誦「同是天涯遇難人、一生何堪對一死」之句、洪・畢皆爲拭淚。返抵廻雁之南、有宮翼然於湘江之上、乃水府殿也。先是艾行可之弟爲予言、始求兄屍不得、依其簽而獲之雲集潭、聞之心動。至是乃入謁之、以從荊・從粤兩道請決於神、而從粤大吉。［時余欲從粤西入滇、被劫後、措資無所、或勸從荊州、求資於奎之叔者。時奎之爲荊州別駕、從此至荊州、亦須半月程、而時事不可知、故決之神。］以兩處貸金請決於神、而皆不能全。［兩處謂金與劉。］余益欽服神鑒。蓋此殿亦藩府新構、其神極靈也。乃覓道者、俱録其詞以藏之。復北登廻雁峯、飯於千手觀音閣東寮、即從閣西小徑下、復西入花藥寺、再同覺空飯於方丈。薄暮、由南門入。是日風和日麗、爲入春第一日云。

■訳注の部

●訓訳

二十三日

碧空晴朗たり。

南郊に出でんと欲し、先づ鐵樓門を出づ。艾行可の家を過ぎ、堂に登りて其の母に見ゆ。則ち行可の屍は已に覓め得て兩日なり。蓋し難に遇ふの地の下流十里の雲集潭に在り。其の母言ふ「昨、親しく其の地に至り、屍を撫して一呼すれば、忽ち眼中の血迸りて我に濺ぐ」と。嗚呼、死する者すら猶ほ此の若し、生くるは何を以て堪へん。其の傷つくる所を詢ふに、云ふ「面に兩槍有り」と。蓋し實に陽侯の虐を助くる所と為る。云ふ所の「支解して四と為る」は、皆訛傳なり。時に其の棺は、城南の洪君鑒の山房の側に停す。洪は乃ち其の友にして、併せて其の親なり。畢君甫適々青烏を挾みて至る。蓋し將に營葬せんと

するなり。遂に與に偕に行く。廻雁の西麓に循ひ、南して崗塢を越え、四里にして其の地に至る。其の處は亂崗繚繞として、間に揜關習梵の室有り。亦た桃花冲の如く然るも、其の連扉接趾に如く能わず、而して閟寂は之に過ぐ。洪君の室は、緑竹前に當る。危崗後ろを環す。内に三楹有り、中に佛像を置き、左は讀書の所たり、右は僧爨の處たり。而して前後に俱に軒の憩ふべき有り。庭中は盆花紛列し、亦た幽棲の淨界なり。艾の棺は嶺側に停る。亟に靜聞と同に荊を披きて之を拜す。余「同に是れ天涯に難に遇ふの人、一生何ぞ堪へん一死に對し」の句を誦す。洪・畢皆な爲めに涙を拭く。

返りて廻雁の南に抵る。宮の湘江の上に翼然たる有り、乃ち水府殿なり。是より先、艾行可の弟予の爲めに言ふ、始め兄の屍を求むるも得ず。其の簽に依りて之を雲集潭に獲たり、と。之を聞き心動く。是に至り乃ち入りて之に謁す。「荊による」と「粤による」との兩道を以て、決を神に請ふ。而して「粤による」大吉なり。[時に余、粤西より滇に入らんと欲す、劫せらるるの後は、資を措するに所無し。或ひと、荊州よりして、資を奎之叔なる者に求むるを勸む。時に奎之は荊州の別駕たり。此より荊州に至るは、亦た須らく半月の程なるべし。而して時事知るべからず。故に之を神に決するなり。]兩處の貸金を以て決を神に請ふに、而皆に全きこと能わず、とす。[兩處とは金と劉とを謂ふ。]余益々神鑒に欽服す。蓋し此の殿も亦た藩府の新構にして、其の神は極めて靈なり。乃ち道を覓むる者は、俱に其の詞を録して以って之を藏す。

復た北して廻雁峯に登り、千手觀音閣の東寮に飯す。即ち閣の西の小徑より下り、復た西して花藥寺に入る。再び覺空と同に、方丈に飯す。

薄暮に、南門より入る。

是の日、風和にして日は麗かなり、入春の第一の日たりと云ふ。

●語注

○堂　住居の母屋。
○遇難之地下流十里之雲集潭　二月十一日条では、雲集潭から十里で新塘站で、更に六里の新塘站対岸に停泊した、とある。
○面有兩槍　顔に刺し傷があったということは、刀傷は致命傷ではなかった、ということか。
○陽侯　古代伝説中の波濤の神。船を転覆させるなどの水災をもたらす。転じて、水災をもたらす波濤を言う。艾行可は、水死であったことを言うか。
○支解爲四　肢体がばらばらになること。ここも「所云」とあるが典故を見つけられていない。
○營葬　葬儀を営む。
○崗　山嶺。
○繚繞　曲がりくねる、まとわりつく。取り囲む、くらいか。
○揜關　門を閉ざす。出入りを頻繁にしないことか。
○習梵　仏教を修行することか。
○連扉接趾　連続して軒を連ねること、か。
○閟　幽静、幽深。
○危　高く聳える。

○楹　家屋の一列を数える単位。棟。
○爨　飯を炊く。
○軒　窓のある廊下、また窓のある小部屋。
○宮　神廟。
○翼然　鳥が翼を広げたようなさま。
○水府　神話伝説中の水神、あるいは龍王が棲むところ。水府殿は不詳。
○簽　お神籤。
○奎之叔　不詳。
○別駕　通判、副長官。
○欽服　敬重佩服。謹んで感心する。従う。
○廻雁峯、飯於千手觀音閣　二月一日条に、回雁峯に登り、千手観音殿で食事を供されたことを記す。
○花藥寺、覺空　二月八日条に、花薬山報恩寺を訪ね、同郷の托鉢僧覚空と会ったことを記す。寺名をここでは花薬寺と表記している。

●口語訳

［二十三日］

《17》亡くなった艾可行を弔う

青空が広がり晴れ渡っている。

城市の南郊に出ようと思い、先ずは鉄楼門から城外へ出る。艾行可の家を訪ね、母屋に入って彼の母親に会った。

行可の遺体は見つかってから二日たっていた。おおよそのことでいえば、遺体は遭難した場所から十里下流の雲集潭にあったという。彼の母親が言うには「昨日、私自身がその場所に行って、遺体を撫で、一声呼びかけたところ、たちまち、遺体の眼の中の血がほとばしり出て、私に降り注いだのです」と。ああ、死んでしまった者ですら、このように涙を流すのだ。まして生き残っているものはどうして泣かずにはおられようか。

遺体の傷について尋ねると、「顔にふた刺しの刺し傷があった」と言う（つまり刀傷は致命傷ではなかった）。思うに実際には波濤の神である陽侯が、盗賊の暴虐を助長して、艾行可を殺したのであろう（艾行可は水死であったと言っているのであろう）。しかし「陽侯の手にかかれば肢体がバラバラになる」と言われているのは、でたらめな伝承だ（艾行可も肢体バラバラではない）。

時に艾行可の棺は、衡陽城南の洪鑑の山房の側に留め置かれているという。洪鑑は、艾行可の友人であり、また親族でもあった。そこへちょうど、畢甫が風水師を伴ってやって来た。これから葬儀を営もうというのである。そこで彼らと一緒に行く。

廻雁峯の西麓に沿って進み、南へ向かって山嶺や山塢を越え、四里でその場所に着いた。そこは山峯がふぞろいでぎざぎざになっている山嶺に囲まれており、その間に門を閉ざして仏教修行に励むものたちの精舎がある。そのようすは桃花冲と同じであるが、桃花冲では精舎が軒を連ねていたが、ここではそれには及ばない。しかし、静かで奥深いさまは、桃花冲に勝るものがある。

洪君の精舎は、前面に緑の竹藪があり、後面は高い山嶺が囲んでいる。三棟の室があり、

真ん中の室には仏像が安置され、左側の室は読書の間であり、右側の室は炊事場である。そしてそれぞれの前後に休憩できる廊下がついている。庭の中には盆に植えた花がたくさん並んでおり、これまた隠棲のための清浄な世界である。

艾行可の棺は、後ろの山嶺の側に留められていた。すみやかに静聞と一緒に、荊棘をかき分けて行き、これを礼拝し、叩拝した。私は「彼はともに天涯の地で困難に遭遇した人であり、その一死に対し私はこれからの一生を耐えきれるであろうか」の句を唱えた。洪君も畢君も、皆な涙を拭うのであった。

《18》水府殿での占い

洪鑑の所から帰り、回雁峯の南に至る。湘江の上に翼を広げたような神廟があった。これが水府殿である。これより以前、艾行可の弟が私にこう言った「ずっと兄の遺体を探し求めていたのですが、なかなか見つかりませんでした。ところが水府殿のお札のお告げにより、遺体を雲集潭で見つけることができたのです、と。この話を聞いて、私はたいそう興味を引かれていた。

そこでここに至って水府殿に入り、神を拝謁した。「荊州（湖北）経由」と「粤西（広西）経由」の二つのルートを上げて、どちらがよいかを神様に決めてもらった。すると「粤西経由」が大いに吉である、と出た［その当時、私は粤西から滇（雲南）に入ろうと思っていたが、盗賊の財産を強奪されてしまい、旅行資金を措置する手立てが無かった。その中である人が「荊州経由を取り、奎之叔という者に資金の援助を求めるのがよい」と勧めてくれた。当時、奎之は、荊州の副長官であった。ただここから荊州に至るには、さらにまた半月の旅程が必要であった。さらに時節も事態も予測できない。そこで神におうかがいを立てたのである］。

二箇所からの借金についても神様におうかがいを立てたが、「どちらも満額はないだろう」とのことだった［二箇所とは、金祥甫と劉明宇とのことである］。私は神様の明察にますますの敬意を抱いた。この殿も藩府が新しく建設したもののようで、その神は極めて霊験あらたかである。道程を尋ねるものはみな、ここで下された霊験を記録して、それを身につけて旅をするのである。

ふたたび北に向かい、廻雁峯に登り、千手観音閣の東寮で食事を取る。取り終えるとすぐに観音閣の西の小道から下り、さらに西に進んで花薬寺に入る。ここで再び覚空とともに、方丈で食事を取る。

薄暮に、南門から城内に入る。

この日は、風は穏やかで日も麗かだった。この春一番の好天だという。

［二月二十四日・二十五日］

《概要》金祥甫の家で穏やかに過ごしす。二十四日夜中に不穏な大声が起こった。盗賊（あるいは起義軍）が城壁を破って侵入しようとしていたのだった。二十五日はその城壁を見物に行き、そのまま市場を散策。趣のある白石を売っていたが、文無しの霞客は購入できず、品評するのみ。「神農黄帝が下り人々を裁く」と唱える伝道者がおり、人民はこぞってそれに流されて大騒ぎになっている。盗賊や、邪教に惑わされる人民など、明末の荒廃したようすが現れている。

■本文の部

二十四日

在金寓、覺空來顧。下午獨出柴埠門、市蒸酥、由鐵樓入。是夜二鼓、聞城上遙吶聲、明晨知盜穴西城、幾被逾入、得巡者喊救集衆、始散去。

二十五日

出小西門、觀西城被穴處。蓋衡城甚卑、而西尤敝甚、其東城則河街市房俱就城架柱、可攀而入、不待穴也。乃繞西華門、循王牆後門、［後宰門外肆、有白石三塊、欲售其一。三峯尖削如指[*1]、長二尺、潔白可愛。其一方竟尺、中有溝池田塍、可畜水、但少假人工、次之、其一亦峯乳也、又次之。］返金寓。

是時衡郡有倡爲神農之言者、謂神農・黄帝當出世、小民翕然信之、初猶以法輪寺爲窟、後遂家傳而戸奉之。以是日下界、察民善惡、民皆市紙焚獻、一時騰鬨、市爲之空。愚民之易惑如此。

●校勘

＊1有白石三塊、欲售其一。三峯尖削如指　黄珅らは「有白石三塊欲售。其一三峯尖削如指」と区切る。これに従って訳す。

■訳注の部

●訓訳

二十四日

金の寓に在り。覺空來顧す。下午獨り柴埠門を出で、蒸酥を市ひ、鐵樓より入る。是の夜二鼓、城上に遙に吶聲を聞く。明晨、盜の西城を穴し、幾んど逾え入られんとし、巡者の救ひを喊びて衆を集むるを得て、始めて散去す、と知る。

二十五日

小西門を出で、西城の穴せらるる處を觀る。蓋し衡城は甚だ卑なり、而して西尤も敝甚し。其の東城は則ち河街市房にして俱に城に就きて柱を架せば、攀じて入るべく、穴するを待たざるなり。

乃ち西華門を繞り、王牆の後門に循ひ［後宰門外の肆に、白石三塊を售らんと欲する有り。其の一、三峯尖削なること指の如く、長さ二尺、潔白にして愛すべし。其の一は方竟尺、中に溝池田塍有りて、水を畜すべし。但だ人工に少假にして、之に次ぐ。其の一は亦た峯乳なりて、又た之に次ぐ。］、金の寓に返る。

是の時、衡郡に倡の神農の言をなす者有り。神農黄帝當に世に出づべしと謂ふ。小民翕然として之を信ず。初めは猶ほ法輪寺を以て窟となすも、後には遂に家ごとに傳へて戸ごとに之を奉ず。是の日を以て界に下り、民の善惡を察すと。民皆な紙を市ひて焚獻す。一時に騰鬨し、市之が爲めに空し。愚民の惑ひ易きこと此の如し。

●語注

○來顧　来臨。

○蒸酥　プリンや茶碗蒸しの類いか。
○竟尺　まるまる一尺。
○溝池　溝と窪み。
○田塍　耕作地のうね。ここでは連続する突起。
○少假　黄珅は、「缺少（欠けている、少ない）」と訳す。
○人工　人が手を加えたもの。ここでは施されている装飾だろう。
○衡郡　衡陽郡だろう。
○倡　唱えるもの。辻説法、伝導者の類い。
○神農黄帝　いずれも中国古代の聖天子。医薬の神としても祭られており、そこから無病息災、幸福をもたらす存在として、担ぎ出されているのであろう。
○翕然　一致するさま、こぞって。
○紙　紙銭。
○騰　勢いよく走る。
○鬨　騒ぎ立てる。

●口語訳

《18》金祥甫の家に滞在、盗賊騒ぎや流言に惑わされる民衆

［二十四日］

金祥甫の寓居に滞在する。同郷の托鉢僧覚空が訪ねて来てくれた。

午後、一人で柴埠門から城外へ出て、蒸酥を買い、鉄楼門から城内に戻る。

夜の十時頃、遠くの城壁のあたりから、ときの声のような叫び声が聞こえてきた。翌朝聞いたところによると、盗賊が西の城壁に穴を開け、ほとんど侵入されそうになっていたが、巡邏者が発見して叫び声をあげて人々を集めることができ、そこでやっと盗賊を追い払うことができた、ということだった。

［二十五日］

小西門を出でて、西の城壁の穴をあけられた所を観察した。思うに衡陽城の城壁はとても低い。なかでも西の城壁は最も損なわれている。一方、城市の東側は河街の市場で、城壁に柱をかけているので、それをよじ登って入ることができる。それゆえ穴をあける必要すらないのである。

その後、西華門をめぐり、王府を囲む壁の後門に沿って進み［後宰門外の店舗で、三塊の白石を売っていた。ひとつ目は、指のような尖った部分が三つ突き出しており、長さが二尺である。潔白でとてもすばらしい。ふたつ目のものは一尺四方であり、表面に溝や窪み、突起があって、水を溜めることができるようになっている。ただ、装飾に乏しく、ひとつ目のものに及ばない。みっつ目のものは鍾乳石のもので、三番目の評価となる］、金祥甫の寓居に帰る。

この時、衡に「神農」のことを唱える遊歴者がいた。神農と黄帝がこの世に出現すると言う。人民はこぞってこれを信じている。はじめは法輪寺を拠点としていたが、やがて家々に伝播し、どの家庭でもこれを信奉するようになった。この日（二月二十五日）に、神農と黄帝が下界に下り、人々の善悪を察して裁きを下すという。人民はみな紙銭を買ってそれを燃やして献上し、一時はみんなして集まってきて大騒ぎになり、市場から人の姿が消えたほどだった。愚民が惑わされやすいのは、このようなものだ。

［二月二十六日から二十九日］

《概要》金祥甫の寓居に滞在。金策がままならない。

■本文の部

二十六日

金祥甫初爲予措資、展轉不就。是日忽鬮一會、得百餘金、予在寓知之、金難再辭、許假二十金、予以田租二十畝立券付之。

二十七、二十八、二十九日

俱在金寓候銀、不出。

■訳注の部

●訓訳

二十六日

金祥甫初め予がために資を措す。展轉して就かず。是の日、忽ち鬮すること一會にして、百餘金を得。予、寓に在りて之を知る。金は再び辭し難く、二十金を假するを許す。予田租二十畝を以て券を立てて之に付す。

二十七・二十八・二十九日

俱に金の寓に在りて銀を候ち、出でず。

●語注

○展轉　重ねて、くりかえし。

○鬮一會　鬮は、くじを引く。黄珅によれば、民間の互助的な金融のありかたで、参加者が均しく一定の資金を出し、貯まった資金を、くじ引きであたった人に融通するというものがあった、という。日本の頼母子講に似ている。

○以田租二十畝立券付之　よく分からない。金祥甫から借りた二十金についての借用書であろうか。しかし、結局この二十金は金祥甫に返すことはなかった。

●口語訳

《19》金祥甫の家に滞在

［二十六日］

はじめ金祥甫は、私のために資金の算段をしてくれていた。しかしなかなかはかばかしくいかなかった。

この日、金祥甫が互助金融で、あたりを引き当て、百金あまりを得た、という。私は金の寓居でこれを知った。貸してくれるというのを断りがたく、二十金を借りることとした。二十畝分の田祖で借用書を作り、金祥甫に渡した。

［二十七・二十八・二十九日］

ずっと金祥甫の寓居にいて、銀が届けられるのを待っていたので、外出できなかった。

■補説「徐霞客の旅行荷物」

二月十一日・十二日条に、盗賊に襲われて被害を受けた徐霞客の荷物の記述がある。そこから、今回の旅行において、徐霞客が携帯していた旅行鞄やその内容がうかがえる。以下確認する。

一・「匣」蓋のある小型のはこ。「遊資」即ち旅費を収納。亡失。
二・「竹撞」薄い竹片による竹かご。「大明一統志」等の書籍、黄道周らから徐霞客にあてた書簡、日記遊記の下書き類を収納。これらは無事だったが、劉愚公にあてた書簡体の小論は亡失。
三・「皮廂」廂は「箱」。皮製の大型のはこ。絹織物、陳継寿から麗江の土司にあてた書簡、「南程続記」を収納。亡失。
四・「掛廂」鍵のかかる箱。「晴山堂法帖」、鉄針、瓶、壺を収納。亡失。
五・「大笥」四角い蓋のある竹籠。果物、餅、「名勝志」「雲南志」等の書籍を収納。亡失。

荷物は五点を数える。一「匣」がいわば金庫であった以外は、書籍類や文書類はいろいろな箱や鞄に分散して収納している。二「竹撞」の中身のみが残存し外は亡失しているが、徐霞客がこれまで記してきた遊記の下書きが二に入っていて残されたことは奇跡的であろう。

薄井俊二訳：二〇二五年三月十一日